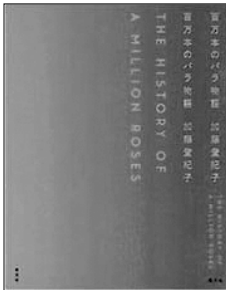


ブックレビュー



『百万本のバラ物語』

加藤 登紀子 著

光文社 刊

定価 1,760円 (本体 1,600円+税)

『百万本のバラ』は、『マーラが与えた人生』という題名で1981年にラトビアの子守唄として生まれた。「マーラ」はキリスト教の女神の名前だ。その歌詞がロシア語に翻訳され、スケールの大きなラブソングに生まれ変わった。「百万本のバラの花を あなたに あなたに あなたにあげる 窓から 窓から 見える広場を 真っ赤なバラで うめつくして」と歌い上げる加藤の日本語訳詩が本書の冒頭にある。

旧ソ連でロシアの人びとに熱狂的に支持されたこの曲の運命に触れながら、加藤は自身と一家の遍歴をユーラシア近現代史に重ねて辿っている。43年に中国東北部のハルビンで生まれ、家族と敗戦後の46年に京都の実家に引き揚げて以来の半生は知られている。

東大文学部の学生時代に第2回日本アマチュアシャンソンコンクール

で優勝した加藤は歌手デビューを果たす。72年には学生運動のリーダーだった藤本敏夫と獄中結婚して話題を呼んだ。藤本が81年に「農的生活」を求めて千葉県に設立した農事組合法人「鴨川自然王国」は今、58歳で亡くなった藤本に代わり、歌手で次女の Yae が継承している。

加藤はこの間に東京と千葉を往来しながら、国内はもとより海外でのコンサートなどに奔走し、女優や声優としても活躍してきた。そうした旺盛な来歴を、本書は「『百万本のバラ』の運命・ハルビンというルーツ・敗戦の青空・スガリー物語・無頼の青春・音楽に故郷を求めて・聖地を歩く・果てなき大地の上に」の全8章構成で振り返っている。要所に添えられた若き日の両親や海外でのスナップ写真も目を引く。

歌の力を信じ、ウクライナ戦争など激動する内外の情勢に対峙して「夢を抱き続ける勇氣」を呼びかける加藤の溢れるような情熱を象徴するように、真紅のバラ色の表紙カバーが鮮烈だ。
(山海野 玄)